秋まき小麦における葉枯症対策の取組み
～葉枯症の発生実態と防除対策について～

写真　管内で発生した葉枯症

概　要 Abstract

管内の小麦低収要因の一つとして成熟期の葉枯症状を把握し原因菌を特定。
上川地域農業技術支援会議の支援を受け、薬剤ならびに防除方法を確認。
地域農業者へ対策を呼びかけ、防除面積は増加。登熟日数の改善と製品収量が向上した。

成　果 Results

原因菌の特定

【H29年】
1．試験場へ検鏡診断依頼
ふ枯病菌とM.ニバーレを確認

M．*Nivele*
（赤かび病）

Phaeosphaeria nodorum
（ふ枯病）

2．M.ニバーレ登録薬剤を散布
→葉枯症の改善は見られず

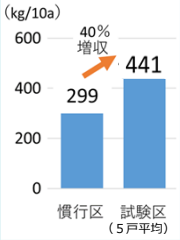
【H30年～】
管内全域を対象に調査&検鏡
⇨ ふ枯病の発生が多いことが判明

調査年	調査ほ数	発生ほ割合	優占菌種
H29	19	37%	M.ニバーレ,ふ枯病
H30	76	96%	ふ枯病
R1	81	11%	なし(少雨年)
R2	13	85%	ふ枯病

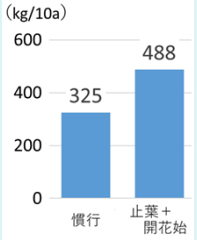
士別管内の葉枯症は
ふ枯病が原因と判明

防除体系の確立

1．防除薬剤の検討
プロピコナゾール乳剤を加用
⇨ 症状改善&製品収量が向上！



2．散布時期の検討



防除適期は
止葉期と開花始

葉枯症を含めた防除体系へ変更

	見直し前（平成29年度）	見直し後（令和2年度）
止葉期	－	プロピコナゾール剤
開花①	テブコナゾール剤	キャプタン・テブコナゾール剤
開花②	イミノクタジン酢酸塩・チオファネートメチル剤	イミノクタジン酢酸塩・チオファネートメチル剤

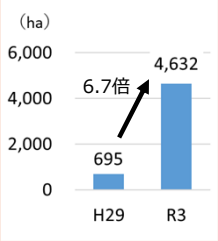
地域収量の向上

現地研修会を
毎年開催

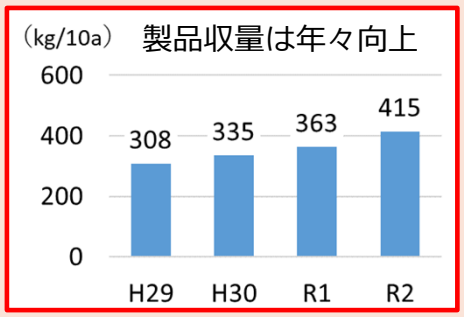
パンフレット作成
&全戸へ配布

地域の変化

延べ防除面積



登熟日数
39日
（H25～29年平均）
⇩
42日
（H30～R3年平均）



普　及 Dissemination

気象条件によって優占菌種が異なるため、
気象に応じた防除を呼びかけていく

連絡先 Contact

上川総合振興局
上川農業改良普及センター
０１６５－２３－１１８１
shibetsu-nokai.11@hokkaido.lg.jp